大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『涼宮ハルヒの憂鬱』を通してみた思春期の心理療法のプロセス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川部, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017956

『涼宮ハルヒの憂鬱』を通してみた思春期の心理療法のプロセス

川　部　哲　也

1．はじめに

心理療法を行っていて，思春期の心理を理解する必要性を感じることは多い。思春期のクライエントに会っている時だけではない。思春期の子どもをもつ親の面接を行う時も必要であり，また，青年期が遷延することの多い現代において，年齢的には大人と言って良い人であっても，心理療法を始めてみるとそこに思春期心性が色濃く現れているという場合は多い。あるいは，発達特性の偏りを持ちながら子ども時代を過ごした人は，年齢的に成人に達してからようやく思春期に突入するという経過をたどることも珍しくない。

本稿では，思春期の心理がよく描かれていると考えられるテキストの分析を通して，思春期の心理療法プロセスについて理解を深めることを目的とする。今回，テキストとして用いるのは『涼宮ハルヒの憂鬱』である。この物語の主人公，涼宮ハルヒという少女は，思春期心性が非常に強いキャラクターとして造形されていると考えられる。彼女がこの物語の中でたどるプロセスは，思春期の心理を理解するうえで有用であると考えられる。

2．『涼宮ハルヒの憂鬱』について

『涼宮ハルヒの憂鬱』は，著者谷川流（たにがわ・ながる）による小説であり，若者向けのライトノベルというジャンルに分類されるものである。2003年に第1巻『涼宮ハルヒの憂鬱』が発行され，その後続編が発表され，刊行のブランクを挟みつつ，原稿執筆時点（2023年1月現在）では12巻まで続いている。2011年6月の10巻，11巻同時発売の時点で文庫本累計発行部数800万部を突破しており，ライトノベルの中で最も読まれた作品の一つと位置付けられている。また，この作品が有名になったのは京都アニメーションによって2006年（第1期，石原立也監督），2009年（第2期，石原立也総監督，武本康弘監督）にアニメ化，2010年には映画化され（石原立也総監督，武本康弘監督），大ヒットした影響も大きい。第1期のエンディングテーマ「ハレ晴レユカイ」は，登場人物たちが踊るダンスがネット上で流行したため，多くの人の目に触れることになった。このような経緯で有名になった作品であるぶん，可愛い女の子が登場する「萌え」アニメの代表格として認知される傾向があるが，実はそうではない。原作を読むとよくわかるのだが，このシリーズ作品は高校を舞台にしたSF小説と呼ぶのがふさわしく，きわめて論理的なSF小説の設定，骨組みを持っている。単なる娯楽小説というよりも，はるかに構造がしっかりしているのである。

ゆえに，文学的な考察の対象となることも多い。簡単に触れておくと，東（2007）は著書『ゲーム的リアリズムの誕生』において，この作品や同時代の漫画の分析を通してポストモダンのありようを検討し，このような作品群を「セカイ系」とを命名した[1)]。宇野（2008）は東の「セカイ系」概念を批判する文脈の中で，この作品を「セカイ系」よりも「脱セカイ系」として日常性への回帰の物語であると論評した。また斎藤（2008）はこの作品の世界観に注目し，阪神大震災がそうであったように，従来の素朴なリアリティが信じられなくなったこの世界に，新たなリアリティを提示しているのがこの作品の特徴であると考察している。いずれも興味深い論点を提供している。また2011年には雑誌「ユリイカ」にて「総特集　涼宮ハルヒのユリイカ！」が組まれ，文芸評論家が様々にこの作品を批評している。この作品の批評だけで単著となっているものもあるし（例えば三浦，2018），近年も評論の対象となり続けている（例えば國部，2020）。また，兵庫県西宮市には，この作品の舞台となった高校や喫茶店，駅などが実在しており，作品のファンがその地を訪れる「アニメ聖地巡礼」（岡本，2018）ブームの先駆けともなっており，今なおその勢いは衰えていない（2022年7月23日から9月25日に，「涼宮ハルヒの巡遊」と題したスタンプラリーが実施された）。ライトノベルを起源にした物語でこれほどまでに影響力をもった作品はあまりないのではないか。これらのことからも，この作品がいかに多くの観点から考察の対象となっているかが窺えるであろう[2)]。本稿は臨床心理学の観点からこの作品の読解を行う。

3．本稿の目的

さて，この作品の魅力のひとつに，主人公の男子高校生キョンが，一人称過去形で語り続けるという文体の特徴がある。客観的な状況描写よりも，主観的なモ

ノローグが大半を占めているため，読者はキョンの主観を追体験することができる。この叙述スタイルは臨床心理学では実は馴染み深いものである。なぜなら，事例研究の文体に非常に近いからである。事例研究は，基本的にセラピストが考えたこと，感じ取ったことが描かれる。客観的情報も記載されるが，それはクライエントが表現した限りのものであり，クライエントが語らなかったことは当然，記載されない。クライエントの心理理解も，客観的なものではなく，あくまでセラピストがそう感じ取ったものとして描かれる。また，事例研究はセラピストが経験した過去の事例を記述することになるため，一人称過去形をベースにした記述になるのは当然のことといえる。本稿では，この作品を一つの事例研究として読み通してみようと思う。

この物語で最も重要な人物は涼宮ハルヒという女子高校生である。詳細は後述するが，このハルヒと主人公のキョンとの関係の変化がこの物語の鍵になっている。その意味で，仮にハルヒをクライエント，キョンをセラピストと見る視点を取った場合に，どんなことが見えてくるかを試みたい。（もちろんこの物語に心理療法は登場しない。あくまで仮の視点である。）この2人の体験過程を丹念に追いながら，思春期心性が展開するプロセスを臨床心理学的に検討することを本稿の目的としたい。

ところで，この作品はシリーズものとして現在も継続している。本来であれば，12巻まで通して検討を行うべきであろうが，本稿では第1巻だけを考察の対象とする。理由は2つある。1つは，この第1巻は角川書店が主催する第8回スニーカー大賞の大賞受賞作の内容であるという理由である。つまり，この作品はそれ1つで完結した物語となっており，完成度が最も高いと考えられるからである。もう1つの理由は，この物語の構成が緻密であり，構造的に理解するのに最も適した作品であることである。2巻以降にももちろん重要なエピソードが描かれているが，結論がもっとも明確に主張されているのがこの第1巻である。

前置きが長くなってしまったが，本稿で考察の対象とする第1巻『涼宮ハルヒの憂鬱』について説明する。物語は県立北高校の入学式の日から始まる。主人公の少年キョンは，1年5組の教室で後ろの席になった少女，涼宮ハルヒに出会う。彼女は自己紹介で「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人，未来人，異世界人，超能力者がいたら，あたしのところに来なさい。以上」という発言をする。彼女は冗談で言ったのではなく，本気で「不思議なこと」を探し求めているのである。この世の理を超えた超越性を希求している点に，彼女の思春期心性の強さを読み取ることができる。この2人の出会いがその後，どのような経過をたどるのであろうか。

4．思春期の心理療法の展開

(1) 涼宮ハルヒの主訴

ここでは仮に，涼宮ハルヒを心理療法に訪れた思春期のクライエントとして考えてみたい。もちろん，作中で彼女が心理療法を訪れる場面はない。しかし，彼女が抱えている問題は多くの思春期の人間の悩みに共通していると考えられるのではないか。例えば，彼女は不思議な現象を求めているあまり，普通の人間には興味が持てず，人間関係を作ろうとしない。物語が進むにつれて明らかになるのだが，彼女はコミュニケーションの能力がないわけではない。勉強もスポーツもできる，どちらかといえば優等生なのである。彼女の問題は現実適応にあるのではない。能力の有無にかかわらず，どうしても普通の人間に対して興味が持てないのである。

岩宮（2009）は，思春期の子どもが「異界」を扱った漫画やアニメ，小説に惹きつけられることが多いと指摘し，「自分の生きている世界を，日常的なレベルを超えてどうイメージし，その中に自分をどう位置づけていくのか，そしてそこで新たな座標を獲得した後で，それをまた日常とどう結びつけていくのかという『超越』を含んだ問いにぶつかるのが，思春期のテーマのひとつなのである」（p.139）と述べている。つまり，子ども時代には，この世界の成り立ちに疑いを持たず，大人の言うことをただ聞いていれば良かったのが，思春期に入ると日常世界をこれまでとは異なる視点から眺めるようになるため，超越的な次元を必要とするのである。思春期に入ると，「なぜ自分は生きているのか？」「生きる意味がわからない」という実存的な悩みを持つし，周囲の人間が皆，常識という名の檻に閉じ込められているように見え，みんな「自分は普通」と思って大多数の中に埋もれて生きているように見える。涼宮ハルヒはまさに，その段階にあるといえる。

彼女は物語の中盤で，キョンに向かって自分の悩みを語るシーンがある。小学6年生の時に，家族で野球を見に行った時に感じた人の多さに驚き「日本の人間が残らずこの空間に集まっているんじゃないかと思った。」しかし，計算してみるとそれは日本の人口全体の2000分の1に過ぎないことを知った彼女は，次のような考えに至る。

それまであたしは自分がどこか特別な人間のように思ってた。家族といるのも楽しかったし，なにより自分の通う学校の自分のクラスは世界のどこよりも面白い人間が集まっていると思っていたのよ。でも，そうじゃないんだって，その時気付いた。あたしが世界で一番楽しいと思っているクラスの出来事も，こんなの日本のどこの学校でもありふれたものでしかないんだ。日本全国のすべての人間から見たら普通の出来事でしかない。そう気付いたとき，あたしは急にあたしの周りの世界が色あせたみたいに感じた。（pp.225-226）

ハルヒは，世界の広さに出会ってしまい，その時に無邪気な子ども時代が終わってしまったと考えられる。自分が特別だと思っていたのにそうではなかったという失望感。子ども時代の万能感からの脱錯覚と呼ぶべきこの状態の反動で，彼女は「面白いことは待っててもやってこないんだ」と考え，中学に入ってからは「面白いこと」を探すために，全力で生きることを決めたのだという。この極端な自意識の高まりは，まさに思春期に突入した時の心理状態をよく表している。この物語が発行された2003年当時にはまだ一般的になっていない用語であったがいわゆる「中二病」という状態が当てはまるだろう。これがハルヒの抱えている心理的問題であり，「主訴」と呼んでも良いのではないかと考えられる。

心理療法においては，思春期のクライエントには明らかな主訴がある場合もあれば，そうではない場合もある。明らかな主訴となっているのは，不登校や摂食障害，リストカットなど，行動面に現れていることが多い。一方で，行動面において大きい問題は抱えていないのだが，無気力や空虚さを感じているクライエントも多い。実は，両方の場合に共通して，底にはこのハルヒが語ったような，生きている実感の乏しさに行き当たる。

物語では，ハルヒがこの「主訴」をキョンに向かって言語化できたのはようやく物語の中盤になってからである。つまり，キョンとの人間関係が成立して初めてこの悩みは言語化された。それまではまったく言語化されることなく，ただイライラし，クラスとも馴染まず，部活にも入らず，友人も作らず，時にエキセントリックな行動を行い，不機嫌に毎日を送るだけであった。思春期の最中にあるハルヒにとっては，自分の悩みを言語化することに大きい困難を抱えていたことだろう。なぜなら思春期とは，自分の心の内容を丁寧に内省し，言語化する余裕のない，嵐のような混沌に置かれていることが多いからである。心理療法においては，クライエントの主訴を言語化してもらうことを急ぐのではなく，まずは傍にいても邪魔にならない程度の信頼関係を築くことが求められる。ではこの物語ではキョンはいかにしてハルヒと対人関係を結ぶことができたのか。そこから見ていこう。

（2）ハルヒとの始まりの会話

キョンが後ろの席のハルヒに最初に話しかけた時の会話は以下のようであった。

「なあ」
と，俺はさりげなく振り返りながらさりげない笑みを満面に浮かべて言った。
「しょっぱなの自己紹介のアレ，どのへんまで本気だったんだ？」
腕組みをして口をへの字に結んでいた涼宮ハルヒはそのままの姿勢でまともに俺の目を凝視した。
「自己紹介のアレって何」
「いや，だから宇宙人がどうとか」
「あんた，宇宙人なの？」
大まじめな顔で訊きやがる。
「……違うけどさ」
「違うけど，何なの」
「……いや，何もない」
「だったら話しかけないで。時間の無駄だから」（pp.13-14）

会話の最初にキョンは，さりげなくにこやかにハルヒに話しかける。友好的な雰囲気を演出したのであるが，その作為は彼女にまったく通用しない。このことは思春期のクライエントに対してよくあることであろう。思春期のクライエントは，作り笑いで近づいてくる他者を信用しない。作り笑いは，常識的な（型にはまった）大人のすることだからである。まず警戒されると思って間違いないだろう。そして会話はうまくいかない。キョンの第一声は「どのへんまで本気だったんだ？」という問いである。この問いはよろしくない。なぜならハルヒが本気で言っているのではない部分があるという前提が含まれているからである。ハルヒが心を閉ざすのは当然のことであろう。ハルヒはあくまで100%本気で発言しているのだから，少しでもその本気度に疑いを挟むような人間には心を開かない。ゆえに即座に「時間の無駄」と会話を切り捨てられることになる。ここではキョンはハルヒとの対話に失敗している。出会い損ねていると言ってもいいだろう。も

しこれが心理療法であれば，クライエントはもう二度と来談しない可能性もある。それほどまでに，思春期のクライエントとの初回面接は難しいのである。しかし，慎重になりすぎてセラピストが何も言わないのも良くない。あなたの話をこれから聞いていきたい，という意思表示のために，セラピストから何かを話しかける必要はある。この時キョンは，わざわざ振り返って後ろの席のハルヒに話しかけている。この行為には積極性があり，意味があったと思われる。

(3) ハルヒとのチャンネルが合う

キョンはハルヒとの最初の対話に失敗したのであるが，その1ヶ月後に次のような対話が行われる。毎日，曜日ごとに髪型が変わっているハルヒの不思議な行動に対し，キョンがコメントするところから始まる。

「曜日で髪型変えるのは宇宙人対策か？」
ハルヒはロボットのような動きで首をこちらに向けると，いつもの笑わない顔で俺を見つめた。ちと怖い。
「いつ気付いたの」
路傍の石に話しかけるような口調でハルヒは言った。
そう言われればいつだっただろう。
「んー……ちょっと前」
「あっそう」
ハルヒは面倒くさそうに頬杖をついて，
「あたし，思うんだけど，曜日によって感じるイメージってそれぞれ異なる気がするのよね」
初めて会話が成立した。
「色で言うと月曜は黄色。火曜が赤で水曜が青で木曜が緑，金曜は金色で土曜は茶色，日曜は白よね」
それは解るような気もするが。
「つうことは，数字にしたら月曜がゼロで日曜が6なのか？」
「そう」
「俺は月曜は1って感じがするけどな」
「あんたの意見なんか誰も聞いてない」
「……そうかい」
投げやりに呟く俺の顔のどこがどうなのか，ハルヒは気に入らなさそうなしかめ面でこちらを見つめ，俺が少しばかり精神に不安定なものを感じるまでの時間を経過させておいて，
「あたし，あんたとどこかで会ったことがある？
ずっと前に」
と，訊いた。
「いいや」
と，俺は答え，岡部担任教師が軽快に入ってきて，会話は終わった。(pp.28-29)

ここで初めて会話が成立したのはなぜか。キョンの一言め「曜日で髪型変えるのは宇宙人対策か？」にその理由がある。この1ヶ月，実はキョンはハルヒの行動をよく観察していたと思われる。そうでなければ，ハルヒの髪型の法則に気がつかないだろう。そして，キョンはハルヒの心理を推測し，それは宇宙人対策かもしれないという考えに至った。

このことは，キョンがハルヒの行動をよく観察し，その行動は無意味なものではないと認めたことを意味する。キョンは先月の失敗を糧に，学習したといえよう。つまり，ハルヒの行動は100%本気であると理解し，ハルヒの行動には彼女なりの意味があると認めたことになる。言ってみれば，ハルヒの世界観を尊重し，キョンはその世界観に参入した。そこでハルヒに初めて会話の相手として認識してもらえたのである。

思春期のクライエントは様々な問題行動をとることがあるが，常識的な大人の視点からは無意味に見えてしまうものである。ハルヒの場合は，曜日ごとに髪型を変えるという無害な行為であったが，思春期のクライエントはもっとシビアな問題行動を起こすこともある。これらの思春期の行動を，大人はとにかく止めたくなるものであるが，この行動をとらないと生きていけないほどに，生きていくのが大変であるという視点を取ることが重要であろう。

もう一つ，ここで面白いポイントは，ハルヒがキョンをじっと見つめた後に「あたし，あんたとどこかで会ったことがある？　ずっと前に」と言うところである。物語の後の巻（第3巻所収の「笹の葉ラプソディ」）で，このセリフが伏線だったことが明らかになるのであるが，ここで「どこかで会ったことがある」ような気がするというデジャヴュが生じたのはそれだけの意味ではないとも考えられる。デジャヴュ体験には，その場所や人物に対する縁のようなつながりを感じる場合がある（川部，2006）。つまりここでのハルヒは，このデジャヴュを通して，キョンとの心理的つながりを直感したとも考えられる。キョンとハルヒとのチャンネルが合ったことを表現しているとも考えられるだろう。

その会話の翌日，ハルヒは腰まで届いていた長い髪を肩の辺りの長さまでばっさりと切る。その理由を作中ではハルヒは語らない。しかし，自分の行動の意味

を誰かに受け取ってもらえたことにより，その行動を続ける意味がなくなった。目的が達成され問題行動の役割が終了したと考えられる。

(4) ハルヒの行動に巻き込まれる

ここからハルヒの積極的な行動が始まる。面白い部活がないかとすべての部活に仮入部したがいずれも普通であることに失望していたハルヒは，突然，自分で部活を作ればいいことを思いついた。この行動も，前段階でキョンという理解者を得たからに他ならない。心理療法においても，自分を理解してくれる存在がいると，思わぬ行動力が現れるということはしばしば見られる。今まで無気力に過ごしていたクライエントが，心理療法を開始すると急に運動を始めたり，楽器を弾き始めたり，小説を読み始めたりして，家族が驚くことがある。良い方向にもそうでない方向にも急に動き出すのが思春期の特徴であるともいえる。

ところで，このハルヒの思い付きは，実は彼女が自分だけで考えたわけではない。キョンとの会話のなかで，キョンの言葉の中から，ハルヒが見つけ出してきたものである。直前のキョンとの会話はこのようなものである。ハルヒが「あー，もう，つまんない！どうしてこの学校にはもっとマシな部活動がないの？」と文句を言っているところへ，キョンのかけたこの言葉。

> **「結局のところ，人間はそこにあるもので満足しなければならないのさ。言うなれば，それを出来ない人間が，発明やら発見やらをして文明を発達させてきたんだ。空を飛びたいと思ったから飛行機作ったし，楽に移動したいと考えたから車や列車を産み出したんだ。でもそれは一部の人間の才覚や発想によって初めて生じたものなんだ。天才が，それを可能にしたわけだ。凡人たる我々は，人生を凡庸に過ごすのが一番であってだな。身分不相応な冒険心なんか出さないほうが，」**
> **「うるさい」（pp.42-43）**

キョンの演説はハルヒによって中断させられたわけだが，この言葉は興味深い。キョンは，意識的には「私たちは凡人であり，新しいものを作り出すことはできない」と語ったつもりだろう。しかし，話の途中には「天才はまったく新しいものを発明するものだ」というメッセージが含まれてしまっている。ここに，キョンの無意識的な意図の現われを読み取ることができよう。つまり，キョンも心のどこかで新しいこと，面白いことが起こらないかと期待していたと考えられる。

このようなアクシデントは，心理療法においてもクライエントとセラピストの意識的および無意識的願望が複雑に絡み合って生じることがある。セラピストの失言には，セラピスト自身の無意識的な意図が入り込んでいることが多い。思春期のケースにおいては，この種のアクシデントが特に起こりやすいように感じられる。

さて，物語では，ハルヒは新しい部活を作ることを決め，無理矢理にキョンに協力させる。部員が一人しかいない文芸部の部室を乗っ取る形で部室を確保し，ハルヒは，これから放課後，この部屋に「絶対来なさいよ」とキョンに命令する。キョンはハルヒの行動にすっかり巻き込まれてしまうこととなる。

(5) コンステレーションが生じる

SOS団（世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団）という名称を考案したハルヒは，次に部員集めに奔走する。5人集まらないと同好会として認められない校則があるからである。これまた無理矢理な形で，ハルヒは文芸部の長門有希，上級生の朝比奈みくる，転校生の古泉一樹の3人を入団（入部）させる。ハルヒによると，SOS団の活動内容は「宇宙人や未来人や超能力者を探し出して一緒に遊ぶことよ！」（p.105）である。この言葉を聞いた団員（部員）は，それぞれに驚き，納得する。物語の中盤で明かされるのだが，実はこの入団した3人の正体は，それぞれ，宇宙人，未来人，超能力者なのである。そして，涼宮ハルヒは，自分が願ったことはすべて叶ってしまうという恐るべき能力の持ち主であることも示唆される。フィクションに許される奇想天外な設定であるが，心理療法においては案外このようなことは起こる。

心理療法が進んでくると，クライエントの対人関係が変化することがある。良いタイミングで，クライエントの人生に影響を与える人物が現れるのである。ただし，この時のセラピストには「コンステレーションを読む」態度が必要とされるだろう。コンステレーションとは星座のことであるが，まるで星座のように自己実現に必要な要素がその人の人生に配置されるという意味である。河合（1993）は，この時のセラピストの態度として，セラピストが自分の心も含めて全体を見ることが必要であることを指摘している。「もしそういうコンステレーションがあるならば，私もその中に生きる」というのが心理療法家の役目であると述べている。コンステレーションを「読む」だけでなく，その状況をセラピストも「生きる」必要があるというの

は重要な指摘である。その意味でキョンは自分は宇宙人，未来人，超能力者のいずれでもないにもかかわらず，SOS団の一員としてこの状況を共に生きることを選んでいるといえよう。この動きは，半ば意識的であり半ば無意識的なものであると思われる。

(6) 治療関係の深まりと見落とし

5人が集まってSOS団の活動が始まる。最初の活動は，駅前を歩き回って不思議なことを探すというミッションである。二手に分かれることになるのだが，そのクジ引きの場面を見てみよう。

「じゃあクジ引きね」
ハルヒは卓上の容器から爪楊枝を5本取り出し，店から借りたボールペンでそのうちの2本に印をつけて握り込んだ。頭が飛び出た爪楊枝を俺たちに引かせる。俺は印入り。同じく朝比奈さんも印入り。後の3人が無印。
「ふむ，この組み合わせね……」
なぜかハルヒは俺と朝比奈さんを交互に眺めて鼻を鳴らし，
「キョン，解ってる？　これデートじゃないのよ。真面目にやるのよ。いい？」(pp.140-141)

ハルヒはクジ引きの結果に不満があるようで，午前の部が終了した後に，もう一度ハルヒはクジ引きをすると言い出す。

クジの結果，今度は俺と長門有希の2人とその他3人という組み合わせになった。
「……」
印の付いていない己の爪楊枝を親の仇敵のような目つきで眺め，それから俺とチーズバーガーをちまちま食べている長門を順番に見て，ハルヒはペリカンみたいな口をした。
何が言いたい。(p.154)

この記述からは，ハルヒがクジ引きの結果に不満なのは，明らかにキョンと一緒になれなかったことにあるだろう。「親の仇敵のような目つき」で爪楊枝を見るほどの大きい不満が読み取れる。しかし，不思議なことに，キョンはそのハルヒの気持ちに全く気がついていない。そのハルヒの様子を見て「何が言いたい。」としか思わず，きわめて鈍感な様子である。心理療法として考えるならば，あれだけハルヒの心理を理解していたキョンがここで大きく見落としている。これは，お互いの距離が近づいたがゆえに，かえって相手の心理が見えなくなるということを示している。人間関係の距離が適切に開いていれば，客観的に相手を見ることができるが，距離が縮まり接近していくとかえって見えなくなるものである。このような場合は，第三者から見ると事態が明瞭に見えることが多いため，ケースカンファレンスやスーパーヴィジョンが有用である。セラピストが必死にセラピーに取り組んでいればいるほど，大きい見落としがあるものである。

(7) 思春期の主訴を聴くということ

駅前散策の後からずっと，ハルヒはひどく不機嫌となる。キョンは「最近マシな顔になったと思っていたのに，また元に戻っちまった。」(p.161) と感じる。キョンの見落としにより，ハルヒの心理状態は元に戻ってしまった。むしろ最初よりも悪い状態になったといえる。人間関係が成立してからのすれ違いは，最初の苦悩よりも大きくなる。「どうして治療者はわかってくれないのか」と不満が噴出しやすいのもこの頃である。しかもキョンはさらにハルヒに「いい男でも見つけて市内の散策ならそいつとやれよ。デートにもなって一石二鳥だろうが」(p.175) という，ハルヒの心情を汲み取らない提案をする。完全にすれ違っている様子が窺える。ハルヒの返事は「ふんだ。男なんかどうでもいいわ。恋愛感情なんてのはね，一時の気の迷いよ」という反論である。ここでハルヒは恋愛を否定している。思春期の人間にとって，恋愛感情をハッピーに感じる人もいるだろうが，恋愛は「気の迷い」以外の何物でもないという人もいる。思春期における恋愛は，人によってはそれまでの安定していた自分を突き崩す攪乱因子でしかなく，脅威と体験されうる。前項で見たように，ハルヒは心の奥ではキョンと2人で歩きたいと思っている。しかし，意識的にはそのような願望は全く認めることができない。このように意識と無意識のギャップが大きいことも思春期の特徴といえよう。このようなハルヒの性格をツンデレと評する評論家は多いが，筆者にはむしろ，ハルヒがしっかりと思春期を生きている証であろうと考えられる。SOS団をお遊びサークルにすればいいというキョンの提案に，ハルヒは厳然と拒否する。

「そんなのつまんないからSOS団を作ったのに。萌えキャラ（筆者注：朝比奈みくるのこと）と謎の転校生（筆者注：古泉一樹のこと）も入団させたのに。何も起こらないのは何故なのよ？　あああ，そろそろ何かパァッと事件の一つでも発生し

ないかな」

こんなに参っているハルヒを見るのも初めてだが，弱気になっている顔は割合可愛かった。笑わなくても普通の顔をしているだけで，こいつはけっこう見栄えがするんだ。つくづく，もったいない。（p.176）

ここでハルヒは，キョンが初めて見るくらいに弱気になっている。ここまで落ち込んだハルヒは初めてであり，明らかに最初よりも苦しくなっている様子である。そしてそんなハルヒに対し，キョンが魅力を感じていることが描かれている。少しだけ，ハルヒに対する好意が意識的になっているようである。

その後，物語では不思議な事件が起こる。クラスメイトの一人，朝倉涼子が突然転校してしまうのである。この事実に「キョン，これは事件だわ」と，ハルヒがすっかり元気を取り戻す（p.201）。転校の事情を調べるべく，朝倉の住んでいたマンションに行こうとハルヒは提案し，無理矢理にキョンを同行させる（この時ハルヒはあとの3人にはなぜか声をかけていない。この形で作者は周到にハルヒの心情描写を行っていると思われる）。

その帰り道に，ハルヒがキョンに語ったのが前述の「主訴」である。思春期の真っ直ぐな悩みがハルヒの口から語られる場面である。キョンと2人で不思議な事件について調べることができた，その帰り道である。ハルヒのささやかな夢がかない，嬉しさもあったかもしれない。その一瞬に言語化がなされたと考えられる。思春期のクライエントが真の悩みを吐露する瞬間は，一瞬のことである。この一瞬のために，それまでの関係作りが長い時間にわたって行われるということを教えてくれているようである。

しかし，悩みを打ち明けられて良かった，という安心感はそこにはない。ハルヒのその後の行動は次のようなものである。

まるで弁論大会の出場者みたいにハルヒは一気にまくしたて，喋り終えると喋ったことを後悔するような表情になって天を仰いだ。

電車が線路を走り抜け，その轟音のおかげで俺は，ここはツッコムべきなのか何か哲学的な引用でもしてごまかしたほうがいいのか，考える時間を得た。ドップラー効果を残して遠くへ去っていく電車を意味もなく見送って，

「そうか」

こんなことくらいしか言えない自分がちょっと憂鬱だ。ハルヒは電車が巻き起こした突風で乱れた髪を撫でつけ，

「帰る」

と言って，もと来た方向へ歩き出した。俺もどっちかと言えばそっちから帰ったほうが早く帰れるんだが。しかしハルヒの背中は無言で「ついてくんな！」と言っているような気がして，俺はただひたすらに，ハルヒの姿が見えなくなるまで――その場に立ちつくしていた。

何をやってるんだろうね。（pp.226-228）

ここには思春期の細やかな心理が描かれているように思われる。ハルヒの主訴は，言えばすっきりするという単純なものではないことに注意が必要だろう。表情は後悔混じりで，キョンにそれ以上の気持ちを語るわけでもなく，ただ「帰る」とキョンを突き放すのみである。キョンも何か上等なことを言おうとするが，「そうか」としか言えない。キョンは自己嫌悪に陥っている。しかし，実はこれでいいのである。思春期の悩みは，簡単に理解されてはいけない。もしここでキョンが「ハルヒの言うことはよくわかった。そうか，お前はそのような悩みを抱いていたんだな」などと理解を示したならば，ハルヒは決定的にキョンを拒絶したであろう。思春期の悩みは，誰にもわかってもらえない自分だけの悩みであるという繊細さを有している。簡単に理解されてしまうと，ハルヒがたまったものではない。安易な慰めは思春期のクライエントが最も嫌悪するものである。キョンは「そうか」としか言うことができず，絶句してしまう。気の利いたことは何も言えない。ただありのままにハルヒの話を受け止めるだけである。それが思春期のクライエントへの唯一の向き合い方であるといえるだろう。

（8）変化と現状維持の狭間

ここからハルヒの振る舞いが微妙に変化する。今まで人前でも平気で着替えを行うくらいに異性の目を気にすることがなかった彼女が，「出てけ！」とキョンを追い出すようになる（p.260）。また，キョンが朝比奈さんと仲良くするのを許せないことも記されている。ハルヒは感情の表出が増えてきた。これは成長といえるものの，ハルヒ本人にとっては自分をコントロールすることができず，苦しい思いをしているところだろう。しかし一方で，キョンはなぜかこの現状に満足しているようである。

あまりの何もなさに物足りなさを感じつつも，

「なあに，時間ならまだまだあるさ」と自分に言い聞かせてもまた漫然と明日を迎える繰り返し。

それでも俺は充分楽しかった。無目的に部室に集まり，小間使いのようによく動く朝比奈さんを眺め，仏像のように動かない長門を眺め，人畜無害な微笑みの古泉を眺め，ハイとローの間を忙しく行き来するハルヒの顔を眺めているのは，それはそれで非日常の香りがして，それは俺にとって妙に満足感を与えてくれる学校生活の一部だった。（中略）

そうさ，俺はこんな時間がずっと続けばいいと思っていたんだ。

そう思うだろ？　普通。

だが，思わなかった奴がいた。

決まっている。涼宮ハルヒだ。（p.264）

キョンはこの5人で過ごすSOS団に満足している。現状を肯定し，この状態が継続することを望んでいる。物語上は，変化を望むハルヒと対照的なキョンの心情として描かれているこのシーンであるが，ここもまた思春期の心理療法の大切なところを教えてくれているように思う。

心理療法が一定段階まで進むと，一種の安定した時期に入ることがある。当初の主訴は解消し，大きい問題は生じていない。まずまずの現実適応もなされており，心理療法における対話も穏やかで，少し楽しいくらいに思えるくらいになっている，というのが典型的である。その安定した時期が重要であるケースもあるが，思春期のクライエントにとっては，物足りなさを感じる場合がある。思春期の人間は大人になるための成長と変化が生じてくるものであり，そのエネルギーが否応なく内側から突きあがってくるのである。このようにして，キョンの生ぬるい現状維持の姿勢は，ハルヒの成長のエネルギーによって突き崩されることになる。一見，安定して平和な状態に見えるので，このままでいいのではないか，とセラピストが思う時もある。しかし，思春期のクライエントはさらに先を目指していることを忘れてはならないだろう。

（9）ハルヒの行動化

ここからは物語のクライマックスである。上記のように，キョンとハルヒの感情の対比が示唆されたその日の夜。自宅で眠ったはずのキョンは，ふと気づくとハルヒと夜の学校で2人きりになっていることに気づく。そこは現実の学校ではなく，夜のように灰色に薄暗く，誰もいない空間で，学校から外に出ることもできない。ハルヒは不機嫌になるとこのような閉鎖空間を作り出してしまう。更に言うならば，ハルヒはキョンと共にいたいと願ったがゆえに，本当に誰もいない学校で2人きりになるという状況を作ったといえる。

このような極端な状況は，心理療法における枠破りを連想させる。クライエントが心理療法の枠の外で会いたいと言ってきたり，セラピストとしての役割以上の何かを求めてきたりすることがある。思春期のクライエントとのセラピーで，あるいは思春期心性が前景化したクライエントとの間に，このようなことはよく生じる。

ハルヒの行動化と呼ぶべき事態に遭遇し，初めてキョンは深刻さに気付いたと思われる。この事態を引き起こしたのは自分であるという自覚が生じかかっている。つまり，ハルヒの心理に対する読みがズレていたために，この事件が起こった。穿った見方をするならば，このズレの最も大きい要因は，キョンが自分の気持ちに蓋をしていたことだろう。この物語をよく読むと，自分の気持ちに最も不誠実なのはキョンである。ハルヒに対して好意を持っているにもかかわらず，そのことにまったく自覚がなく，ハルヒの思いを尊重する姿勢もなく，ただ漫然と現状維持を望んでいたわけである。ここでは鈍感なキョンに対し，ハルヒが自分の気持ちをストレートに伝える行動化を起こしたと見ることができるだろう。思春期のクライエントとのセラピーが深まってくると，このような激しい行動化の背後に，セラピストへのメッセージが込められている場合がある。最後のあがきと言ってもいい。ここを逃すと，その後もう二度と治療のチャンスは巡って来ないというくらいの，大勝負の場面と考えられる。

物語に戻ろう。この閉鎖空間には誰もいないと思われたが，中庭に直立する光の巨人を発見した。校舎を破壊する巨人の姿に，「キョン！　なんか出た！」とはしゃぐハルヒ。そこへキョンが語りかける。

「元の世界に戻りたいと思わないか？」

棒読み口調で俺は言った。

「え？」

輝いていたハルヒの目が曇ったように見えた。灰色の世界でも際立つ白い顔が俺に向く。

「一生こんなところにいるわけにもいかないだろ。腹が減っても飯食う場所がなさそうだぜ，店も開いてないだろうし。それに見えない壁，あれが周囲を取り巻いているんだとしたら，そこから出て行くことも出来ん。確実に飢え死にだ」

「んー，なんかね。不思議なんだけど，全然その

ことは気にならないのね。なんとかなるような気がするのよ。自分でも納得出来ない，でもどうしてだろ，今ちょっと楽しいな」
「SOS団はどうするんだ。お前が作った団体だろう。ほったらかしかよ」
「いいのよ，もう。だってほら，あたし自身がとっても面白そうな体験をしているんだし。もう不思議なことを探す必要もないわ」（p.283）

ここでハルヒはこの空間に留まることを選ぼうとする。あれだけ熱心に作ったはずのSOS団も，もう要らないと言う。ハルヒはここで「自分が本当に望んでいること」をはっきりと自覚したといえるだろう。不思議なことがないかと外の世界を無闇に探すのではなく，キョンと2人で面白い体験をしていることを「楽しい」と思えた。「今ちょっと楽しいな」という言葉からは「今，ここ」にある幸福感を見つけることができているといえる。この時点で，ハルヒの思春期は終わりつつあるといえるだろう。これが私，これが自分の望むこと，これが自分の大事なもの。それらを自覚することにより，思春期は終わり，「私」という主体が立ち上がると考えられる。

ではそんなハルヒに対するキョンは何をしたのだろうか。まずはハルヒへの反論である。

「俺は戻りたい」
巨人は校舎の解体作業の手を休めていた。
「こんな状態に置かれて発見したよ。俺はなんだかんだ言いながら今までの暮らしがけっこう好きだったんだな。アホの谷口や国木田（筆者注：キョンの級友たちである）も，古泉や長門や朝比奈さんのことも。消えちまった朝倉をそこに含めてもいい」
「……何言ってんの？」
「俺は連中ともう一度会いたい。まだ話すことがいっぱい残っている気がするんだ」
ハルヒは少しうつむき加減に，
「会えるわよきっと。この世界だっていつまでも闇に包まれているわけじゃない。明日になったら太陽だって昇ってくるわよ。あたしには解るの」
「そうじゃない。この世界でのことじゃないんだ。元の世界のあいつらに，俺は会いたいんだよ」
「意味わかんない」
ハルヒは口を尖らせて俺を見上げていた。せっかくのプレゼントを取り上げられた子供のような怒りと悲哀が混じった微妙な表情だ。
「あんたは，つまんない世界にうんざりしてたんじゃないの？　特別なことが何も起こらない，普通の世界なんて，もっと面白いことが起きて欲しいと思わなかったの？」
「思ってたとも」（中略）
俺は決意して，そして言った。
「あのな，ハルヒ。俺はここ数日でかなり面白い目にあってたんだ。お前は知らないだろうけど，色んな奴らが実はお前を気にしている。世界はお前を中心に動いていたと言ってもいい。みんな，お前を特別な存在だと考えていて，実際そのように行動してた。お前が知らないだけで，世界は確実に面白い方向に進んでいたんだよ」（pp.283-286）

ここで初めて，キョンは自分の考えを表明している。それがハルヒの気に入る言葉ではないとわかっていても，キョンが自分で感じ，考えたことを伝えている。ハルヒの主体が立ち上がった時，キョンもまた自分の思いを口にすることができた。特に最後の部分にある，ハルヒの周囲で起こっていたことを説明しているところは，ハルヒを説得するような勢いがある。単にハルヒに振り回されているのではない，キョンの主体性が初めて感じられるところである。心理療法においては，基本的にセラピストは自分の意見を言うことはあまりない。他人の意見を押し付けて解決するようなら，最初から心理療法を受けにきていないはずだからである。あくまでクライエントが自ら発見的に解決を見出していくことが重視される。しかし，思春期の心理療法ではその原則を崩されることが多い。ありきたりの治療者の姿勢では手応えがないため，クライエントはセラピストの「本音」の在り処を探ることがある。時々，「先生は本当にそう思ってるんですか？」と聞いてくることがある。思春期ならではの鋭い感性のなせる業である。そのように考えると，キョンの主体性はハルヒによって引き出されたと言っても良い。ハルヒの成長があり，それに触発されてキョンもまた成長していく。心理療法とは両者の成長と変容が生じる場であるといえよう。

（10）キョンの自覚と覚醒

続いてキョンは，「涼宮ハルヒの存在を，俺はどう認識しているのか？」（p.286）という自問を行う。

ハルヒはハルヒであってハルヒでしかない，なんてトートロジーでごまかすつもりはない。ないが，決定的な解答を，俺は持ち合わせてなどいな

い。そうだろ？　教室の後ろにいるクラスメイトを指して，「そいつはお前にとって何なのか」と問われて何と答えりゃいいんだ？　……いや，すまん。これもごまかしだな。俺にとって，ハルヒはただのクラスメイトじゃない。もちろん「進化の可能性」でも「時間の歪み」でもましてや「神様」でもない。あるはずがない（筆者注：これらの3つの単語は宇宙人，未来人，超能力者がそれぞれにハルヒを定義するために用いた語である）。（中略）

俺はハルヒの手を振りほどいて，セーラー服の肩をつかんで振り向かせた。

「なによ……」

「俺，実はポニーテール萌えなんだ」

「なに？」

「いつだったかのお前のポニーテールはそりゃもう反則なまでに似合ってたぞ」

「バカじゃないの？」

黒い目が俺を拒否するように見える。抗議の声を上げかけたハルヒに，俺は強引に唇を重ねた。（pp.287-288）

この場面で，キョンはついに自分の感情の蓋を取り去る。今までずっと自分の気持ちをごまかしてきたため，簡単に蓋が取れない様子もよく描かれている。キョンはハルヒに対する自分の気持ちを行為によって示すこととなる。ようやく，キョンは自分の気持ちを自覚し，事態は解決に向かう。閉鎖空間が解消し，元の世界に帰ってくるのである。

この場面を心理療法として考えてみると，セラピストがこのような身体接触の行動化をすることは決してないのであるが，心の出来事として見てみると興味深い。すなわち，セラピストが以前から抱いていたクライエントに対する見立て，クライエントに対する思いを明瞭に自覚するという事態である。それはポジティブでもありうるし，ネガティブでもありうる。セラピストであるという役割上，クライエントを無条件に受容せねばという意識が自覚的にも無自覚的にも発動しがちである。ゆえに，クライエントに対して感じるかすかな感情には蓋をしてしまうことがある。例えば，クライエントに対して，どこか嫌悪を感じていてもその嫌悪を自覚することができず，中立的な態度を表面上保つことが起こりうる。しかし，それでは本当にクライエントとの関係を築くことはできない。重要なのは，クライエントに嫌悪している自分を自覚し，そのことを真剣に熟考することであろう。その作業なくして，セラピーは前に進まない。この自覚がなされない場合はセラピーが中断することになるだろう。

キョンはハルヒとの関係の臨界点において，ついに自分の気持ちを自覚した。覚醒したといってもいいだろう。この場面の直後に，閉鎖空間は解消し，自室のベッドで目を覚ます。文字通りの覚醒である。目を覚ましたキョンは自分がしたことの恥ずかしさのあまり頭を抱えるが，これはまだ自覚した感情を認めるのに時間がかかっているのだと考えられる。しかし，今ここにある感情に開かれることにより，これまでの人間関係は終わり，新しい関係に移行するといえるだろう。このことを予感させるのが，翌朝，登校したキョンが教室に入った場面である。

窓際，一番後ろの席に，ハルヒはすでに座っていた。何だろうね，あれ。頬杖をつき，外を見ているハルヒの後頭部がよく見える。

後ろでくくった黒髪がちょんまげみたいに突き出していた。ポニーテールには無理がある。それ，ただくくっただけじゃないか。

「よう，元気か」

俺は机に鞄を置いた。

「元気じゃないわね。昨日，悪夢を見たから」

ハルヒは平坦な口調で応える。それは奇遇なことがあったもんだ。

「おかげで全然寝れやしなかったのよ。今日ほど休もうと思った日もないわね」

「そうかい」

硬い椅子にどっかと腰を下ろし，俺はハルヒの顔をうかがった。耳の上から垂れる髪が横顔を覆っていて表情が解りにくい。ただ，まあ，あんまり上機嫌ではなさそうだ。少なくとも，顔の面だけは。

「ハルヒ」

「なに？」

窓の外から視線を外さないハルヒに，俺は言ってやった。

「似合ってるぞ」（p.292）

ハルヒがポニーテールにしていること，その髪型をキョンが褒めることで，2人のコミュニケーションが成立していることが見て取れる。2人は思春期を終え，この日常世界で共に生きていこうと決意した場面であることが読み取れるだろう。ハルヒの主訴は，このようにして解決していったのだと考えられる。

以上，ハルヒをクライエント，キョンをセラピスト

と見立てて，思春期の心理療法プロセスをたどる試みを行ってきた。結果として見えてきたのは，思春期の始まりと終わり，その間に横たわるダイナミックなプロセスであったといえる。そこにはクライエントとセラピスト双方が共時的に変容している様子が現れていたと考えられる。一方で，このようなプロセスは，思春期のケースにおいていつも起こることではないだろうし，これが理想的なプロセスであるとも言い切れない。ではなぜキョンはハルヒとの間にこのプロセスが生じたのであろうか。おそらくは，ハルヒと同様にキョンもまたこの世の理を超えた現象への強い希求を持っていたこと，いわば，ハルヒと同型の思春期心性を有していたことが大きい要因と考えられる。ハルヒはキョンを巻き込む形で，そしてキョンはハルヒに巻き込まれる形で，同型の思春期心性の渦に2人で飛び込んだのがこの物語で起こったことだろう。その意味で，この物語に現れた心理療法プロセスは意図的に起こせるものではない。意図的には起こせないものの，クライエントとセラピストとの間で同型の思春期心性が共鳴した際に必然的に辿ることになる，双方の心理的変容をこの物語は描いているといえよう。

蛇足ながらもう一つ，セラピスト側の変容について付け加えるとするならば，セラピストが自身の思春期の記憶の蓋を開け，自身の思春期心性とあらためてつながること，すなわち思春期をあらためて生き直すという心の作業が思春期のセラピーには必要となってくることも示されているといえよう。

5．おわりに

本稿では『涼宮ハルヒの憂鬱』の物語をテキストに据え，心理療法を通して思春期心性がどのように展開するのかを見てきた。この物語は20年前に書かれたものではあるが，今なお思春期心性を理解する一助になると考えられる。しかし，岩宮（2016）が「最近は，思春期まっただなかの年齢である10代の人と会っているときよりも，20代，30代，40代，いや，どうかすると60代の人とお会いしているときに，思春期をめぐるさまざまな冒険をしているように感じることが多い」と指摘しているように，従来は10代の心理として捉えられてきた思春期心性が，現代ではあらゆる年代に拡大してきているといえる。もしかすると40代の涼宮ハルヒと出会う可能性もあるのである。また，現在の思春期の子どもが好む異界ものの漫画，アニメ，小説を見わたすと，『涼宮ハルヒの憂鬱』で描かれたような，しっかりしたSF設定に裏づけられた本格的な非日常的異界の物語は2020年代にはもはや減少しており，この世の理がそのまま異世界に持ち込まれる（特にゲーム内世界の設定がそのまま反映される）物語が多いことが指摘されている（名取，2020）。これでは本当の意味で思春期に重要な「異界」とは呼べないように思われる。この種の「異世界もの」は従来の「異界」とは異なるものであると西嶋（2022）は指摘している。彼の論によると，現代の「異世界もの」の特徴として，①定型性（ゲーム的なファンタジー世界のコピー），②既知性（異世界なのに既知の世界），③可視化と序列化（能力等の数値化・可視化）が挙げられる。これらの点からわかるように，現代の「異世界もの」の物語は，この世の理を超えた超越性をもはや備えていないというのは重要な指摘であろう。超越なき異界を臨床心理学的にどのように考えたら良いか，そしてそれは現代の思春期のクライエント理解に有用なのだろうか。これらの問いへの答えを探究することは今後の課題としたい。

文献

東浩紀（2007）．ゲーム的リアリズムの誕生．講談社現代新書．
土居豊（2012）．ハルキとハルヒ　村上春樹と涼宮ハルヒを解読する．大学教育出版．
岩宮恵子（2004/2016）．増補　思春期をめぐる冒険　心理療法と村上春樹の世界．創元社．
岩宮恵子（2009）．フツーの子の思春期．岩波書店．
川部哲也（2006）．既視体験における主観的体験内容についての一考察．心理臨床学研究，24，99-109．
河合隼雄（1993）．物語と人間の科学．岩波書店．
國部友弘（2020）．交換不可能な大衆　―『涼宮ハルヒの憂鬱』論―．日本文学，69(**6**)，23-34．
三浦俊彦（2018）．エンドレスエイトの驚愕．春秋社．
中西新太郎（2011）．シャカイ系の想像力．岩波書店．
名取琢自（2020）．「異界」は潜伏期に入ったのか？異世界転生アニメに見えるもの．ユング心理学研究，12，111-117．
西嶋雅樹（2022）．「異界」と「異世界」．精神療法，48(**1**)，35-39．
岡本健（2018）．アニメ聖地巡礼の観光社会学．法律文化社．
斎藤環（2008）．文学の断層　セカイ・震災・キャラクター．朝日新聞出版．
竹中均（2012）．精神分析と自閉症．講談社．
竹中均（2016）．自閉症とラノベの社会学．晃洋書房．
竹中均（2020）．「自閉症」の時代．講談社現代新書．
谷川流（2003-）．涼宮ハルヒの憂鬱．角川スニーカー

文庫.
宇野常寛（2008）．ゼロ年代の想像力．早川書房.
「総特集　涼宮ハルヒのユリイカ！」（2011）．ユリイカ，43（**7**）.
涼宮ハルヒの巡遊　公式ページ．https://www.hyoda.com/haruhinishinomiya/（2023年1月10日閲覧）

注）

1）セカイ系とは東（2007）による概念であり，「主人公と恋愛相手の小さく感情的な人間関係（「きみとぼく」）を，社会や中間項を挟み込むことなく，「世界の危機」「この世の終わり」といった大きな存在論的な物語に直結させる想像力」を意味する。代表的なものとしては，新海誠のアニメーション『ほしのこえ』や，高橋しんの漫画『最終兵器彼女』などが挙げられる。『涼宮ハルヒの憂鬱』もまた，文学批評の文脈ではセカイ系の作品の一つとして考えられている。

2）『涼宮ハルヒの憂鬱』はまた，多様な深読みを誘う作品でもある。例えば，涼宮ハルヒを自閉症者と想定して社会学の立場から論じる竹中（2012; 2016; 2020）の論や，ハルヒを「俺様主義」と位置づけ，自己中心的であるがゆえに今時の若者に魅力的に映るという中西（2011）の論，村上春樹作品と涼宮ハルヒを比較検討する評論家の土居（2012）の論などがある。筆者はこれらの考察の妥当性を判断する立場にないが，この作品が種々の深読みを許す魅力的なテキストであることは確かであろうと考える。本稿も，おそらく筆者の観点の偏りに由来する「深読み」がなされている可能性が高い。その点については，読者のご批判を仰ぎたい。

（2023年1月10日受稿，2023年2月1日受理）